



白井 克彦 (SHIRAI, Katsuhiko)

早稲田大学理工学術院教授 / 工学博士

先端科学・健康医療融合研究機構 機構長 / 総長

第15代早稲田大学総長。総長として多忙な一方、研究者としては、音声や画像を処理し、人と機会を結ぶ知的インターフェースの研究をテーマに掲げ活躍中。

日本音響学会理事、人工知能学会会長を歴任し、現在は私立大学情報教育協会副会長、日本放送協会放送技術審議会委員、文部科学省大学設置・学校法人審議会委員など役職多数。

主な著書に、『信号解析とデジタル処理』（共著、風培館）『岩波講座 言語の科学 2 音声』（共著、岩波書店）などがある。

合唱を通して得た人のネットワークと「無」から「有」を生み出す喜び

私は小さい頃から、機械あるいは広く科学的なことが大好きでしたから、理工学部に入り工学の研究者になるまでに何の迷いもなく、その後もただ好きなことに夢中になって過ごさせてもらいました。これまで40年以上にわたって非線形振動の研究などから始まって、音声認識・合成技術、自然言語処理、信号処理、C A I等を中心にヒューマンインターフェースの研究に従事しています。それが私の人生の大半を占め、生業としてきているのでありますが、実は私にも趣味と呼ぶべきものもあります。ほぼ30年近くにわたって、私のいわば、人生の基盤を与えてくれたと言っても過言でないのが、合唱活動であります。中学3年生の時にコーラスグループを立ち上げたのに端を発する活動です。当時、音楽の先生が体調を崩して、代理教員として国立音楽大学からこられた石河清先生に会ったのが、直接のきっかけです。その時、石河先生に指導を仰ぎ、卒業式の謝恩会で返礼の意味を込めてコーラスを披露したのが始まりです。中学を卒業し、



駒場にもじってめいめいされた男性4名のカルテット『コマビアンズ』

メンバーはそれぞれ違う高校に進んでもこの活動は続いて行きました。創立時の9人の仲間が私の生涯でかけがえのない無二の親友となりました。石河先生は福島県を中心に活動され、合唱界を代表する人になっていられました。

この合唱団は1955年3月に、北多摩郡国立町立国立中学校(現在の国立市立一中ですが)の音楽好きの第8期9名によって創立した会で、地域名から「国立ときわ会」と命名しました。はじめは細々と音楽を楽しめさえすれば良いと思って開始した活動でしたが、市民合唱団にするべく、国立駅前までピラ配りまでして頑張りました。結果ですが生意気にも高校生が一般のサラリーマンや市民を巻き込んでいたわけです。ときわ会は今も国立で確固たる合唱団体として続いています。この活動の中では、何よりも地域社会との関わりの大切さや一市民としての営みの重要さを体得できた気がします。この精神がときわ会の源流に流れていて、「ときわ会」の定期演奏会には地元の老若男女が来てくれるのです。聴衆と、なるべく一体になった演奏会にしたいと思い、「モーツアルトやブラームスなどのクラシック作品」、以外に聴きなれたポピュラーソングのステージを組合せたプログラムを定型にしました。知らず知らずのうちに、



1967年
国立ときわ会 第三回発表会
(上写真)

第一回発表会のプログラム
(左写真)

「東京都都民合唱コンクール」で8回の優勝を数え、また、これももうすでに地元の国立で、30回以上の定期演奏会の実績を持つ「くにたち音楽祭」や「三多摩合唱祭」「東京都合唱際」にも毎年出演し、都内でも有数の名門合唱団と呼ばれるまでになっていました。

確かに本格的な実力も兼ね備えているとは思いますが、それ以上に歌う人も聴く人も誰にでも楽しんでもらえる活動をたくさん積んできました。その甲斐あって、多くの合唱ファンや地域の人々に親しまれる合唱団に成長してきたと自負しています。2000年からは、世田谷の特別養護

老人ホーム「蘆花ホーム」の中に開設されている一番瀬康子元東京女子大学学長が主催する「生涯青春大学」の年末修了式で、「稲門グリークラブ・シニア」と「国立ときわ会」がジョイントでクリスマスコンサートを開催しています。この合唱活動を通じて、「もの」を作り上げる楽しさや喜びを経験してきました。

そして、今、先端科学・健康医療融合研究機構が立ち上がり、その活動を開始するにあたり、私は「国立ときわ会」を始めた頃のあの何かを成し遂げなくてはという気持ちを思っています。それは、また新たな「もの」を作る活動がまた始まったからでしょう。この研究機構の活動が、人類の新たな分野への船出となる重要な第一歩となるものであることを自覚し、決意を新たにしています。



ときわ会レフレット